

高宮建一郎先生と開催した2度の国際会議

京都大学大学院地球環境学堂 三室 守

昨年11月、東京工業大学の高宮建一郎先生が交通事故のため急逝されました。あまりにも突然だったため、最初聞いた時には、当然のことながら嘘としか思えませんでした。しかし、その後、インターネット上の新聞報道等から、これは事実であるということを得心せざるを得ませんでした。一挙に暗い気持ちになってしまいました。

私は追悼文を書くのには必ずしも適任ではありません。しかし、先生には大変お世話になりました。それをここに改めて残しておくことが重要だと考えるようになりましたので、先生と開催した2回の国際会議について記したいと思います。

最初の会議は、1992年、日本で開催された第9回国際光合成会議 (ICP) の直前に兵庫県三田市で開いたサテライト集会であり、2度目は2003年に東京都江戸川区で開催した国際光合成原核生物シンポジウム (ISPP) です。

1989年、ストックホルムで開催されたICPで、次の開催国が日本に決まった時、私はドイツのA. R. Holzwarth, スウェーデンのT. Gillbroら数名のアンテナ屋とビールを飲みながら、日本での開催時に色素系に関するサテライト集会を開催したら参加するか、と聞きました。彼らの返事はもちろん参加するというものでした。そこで、私は帰国後すぐに準備を始めました。

同じようにサテライト集会の開催を考えておられる方が高宮先生でした。私はシアノバクテリアを中心に研究を進めてきたため、光合成細菌を中心に研究を進めておられた高宮先生との接点を実質的にはありませんでした。都立大 (当時) の松浦克美先生に開催を相談したところ、高宮先

生との競合を避けて合同で行うのもよいのではないかとのアドバイスを受けたのが、一緒に開催を行う契機となりました。

組織としては、高宮先生がChair、私がVice-chair、東工大 (当時) の塩井祐三先生に会計幹事を担当していただき、その他に約10名の方々に実行委員としてご参加いただきました。会場は関西学院大学小山泰先生のご厚意で三田市にある関西学院大学のセミナーハウスを使わせていただくことになりました。組織委員会では、どの会議でも同じように、プログラム、資金調達、渉外など一連の作業が分担して行なわれていきました。この時に私が感じたことは、おそらく高宮先生を知るほとんどの方が感じられたことと同じではあると思いますが、着実に仕事を進められる方であるということでした。また、人に対する接し方が私とはかなり違っていましたので、幾度か驚いたことを記憶しています。結果としてサテライト集会は大成功で、三田から名古屋のICP本会議場に着了いた時、成功裡に終わったことが結構噂になっており、二人で喜びを分かちあったことを覚えています。

サテライト集会の運営には、ひとつの意図の下に若い方にも積極的に参加していただきました。それは会議の開催、運営方法を肌で覚えてもらうことでした。ICP本会議は、文部省 (当時)、学術審議会などの委員を設定することが必要で、そのために平均年齢が高くなっており、次の世代が参加し、継承するには不適切であったからです。

このサテライト会議が出発となり、その後、ふたつの動きがあり、それは現在でも継続しています。ひとつはICPの前にアンテナ系に関するサテライト集会が開催されるようになったことです。

ハンガリー、フランス、オーストラリア、カナダ、と受け継がれています。もう一つは、私がその後お世話させていただいている「光合成細菌の反応中心とアンテナ系に関するセミナー」です。昨年「光合成の反応中心とアンテナ系に関するセミナー」と名称を変えましたが、今年は第14回目を迎えます。最初25名くらいで始めたこのセミナーもここ数年間は約100名近い方に参加してもらえるところまで成長してきました。匹敵する内容をもつセミナーが日本にはありませんので、現在でも、物理、化学、生物の垣根を取り払った議論を続けています。これらのふたつは高宮先生のご尽力の賜であることは明々白々です。

ふたつの目の国際会議は2003年のISPPです。高宮先生がChair、小俣先生（名古屋大学）がVice-chairで進められました。これも非常にうまく運営され、ISPP始まって以来の評判となるほどでした。これに関しては適任者がたくさんおられますので、私が敢えて書く必要はないと思います。ただ、ひとつだけ書いておくべきことがあるとすれば、日本での開催を高宮先生にお願いに行ったのは、私と松浦先生だったらしいのです。私は完全に記憶の外になってしまっているのですが、松浦先生の言によれば、日本でISPPを開催できればいいね、と話をし、実現するためには高宮先生にお願いしようということになったとのこと。このこと背景になっているのは三田でのサテライト集会の開催であったことは疑うことのできないことです。

実際にISPP関連の仕事をはじめてからは高宮先生とは色々な点で意見の相違が生まれました。電話で何度もやりとりを行いましたが、歩み寄ることができなかった点もいくつか残りました。しかし、最終的には高宮先生の気配りと粘り強い仕事で成功へ導いたことは確かです。ICPの時と違って、次世代を担う人が中心になって運営が進められましたので、光合成の領域に大きな財産となって残りました。これは極めて重要なことだと思います。

高宮先生とは長い間お付き合いをさせていただきましたが、研究を一緒にすることはありませんでした。昨年春、先生から私が現在使っているちょっと奇妙なシアノバクテリア、*Gloeobacter violaceus* を使って共同研究をしようとの提案がありましたので、喜んでお引き受けしました。しかし確たる結果が出ない時期に他界されてしまいました。ようやく議論ができる土壌が整ったのに、何故このようなことになってしまっているのか、その理不尽さを嘆きながら、今に至っていません。

高宮先生と国際会議を2度お世話しましたが、その中で特に強く心に残ったことは次の点でした。それは、「次の世代に何を残せるか、を常に考えて行動しなさい」という無言のメッセージです。高宮先生は光合成研究会の会長を務められ、その間には光合成事典の編集などを行われました。それらの仕事は、おそらく避けて通ることができたはずですが、先生は真正面から取り組まれました。ここに強い意志を感じます。

多くの研究者は自らの後継者を育てたいと考えます。研究内容が直接関連していなくても良いのですが、自分たちが切り開いてきた研究領域の継続性を求めるのは自然のことです。この点において、広い視野で見ることのできる人は、より広い範囲の進展に貢献できる、ということを高宮先生の生き方は示していると私は感じています。無言の手本は理解できる人にだけ伝わればよい、直接的でなくとも自ずと井戸を掘った人の顔が浮かぶものである、とのメッセージを私は感じています。

最後に、先生のご冥福を心からお祈り致します。